

駿建

2019 Jan. vol.46 No.4

日本大学理工学部建築学科 日本大学短期大学部建築・生活デザイン学科

# SHUNKEN

Quarterly Journal of  
Department of Architecture, College of Science and Technology, Nihon University  
& Department of Architecture and Living Design, Nihon University Junior College

SPECIAL FEATURE

## 大学院の 楽しさを 語ろう

SPECIAL FEATURE

# 大学院の 楽しさを 語る

大学院って、どうしてあるのでしょうか？  
大学院って、どのようなところなのでしょう？  
大学院って、進学してみたいですか？

日大理工建築に入学して、学部生活が始まると、  
皆さんは、建築のさまざまな分野を広く学びはじめます。  
あまりの多様さに、驚きやとまどいもあるでしょう。  
でもその中で、将来を見据えながら、  
小さくても“気になる何か”を紡ぎ出していかなくてはなりません。

最初は、小さな興味やきっかけかもしれません。  
でも、すべてはその選択からはじまります。

大学院は、社会に出る前に、あなたが選択したその小さな興味を、  
自分自身で膨らませることができる貴重な時間です。

今回は、日大理工建築の大学院で学ぶ大学院生や先生方に  
“大学院の楽しさ”について語っていただきました。

もちろん、楽しさの裏側にはさまざまな壁があることは言うまでもありません。

それでも、先生や仲間たちに困まれながら、  
自分ひとりで物事を考え、構築できる力を養ったり、  
ひとりの人間としても、大きく成長できたり、  
大学院生という時間は、学部生時代には、  
まったく体験できない何かが存在しています。

大学院って、想像以上に楽しいところのようです。  
これを機会に一度、真剣に大学院への進学を考えてみてください。

大学院の  
楽しさを  
語ろう

# 1 設計・計画系

## 自分の好きなことを積極的に語れるように

佐藤千香 (M2 | 山崎研究室)

**私**は、大学院では建築やまちづくり工学の授業に参加しながら、ゼミや自主活動では造園やランドスケープデザインを勉強しています。現在は、飲食施設を利用したパークマネジメントをテーマに研究を行っています。研究室活動の一環で公園の再整備に関わったり、自主的な活動を通して公園整備・運営・管理に関わる方にお話をうかがう中で、パークマネジメントについて興味を持ちはじめました。

大学院への進学を決めたのは、学部3年生の後期です。興味を持ちはじめたことに対し、もっと勉強したいと思ったからです。学部生時代にも、もちろん建築のことを全般的に勉強してきましたが、さらに興味のある対象ができたときに、まだまだ学びきれていないと感じました。その頃、学外でさまざまな専門分野の方とお話をする機会が増えたことも、理由のひとつです。自分の専門分野について、より詳しく楽しそうに話す方々と関わったときに、私もそうなれたらと思い、もっと専門性の高い大学院への進学について考えはじめました。

大学院生活は、授業の課題やゼミ活動、ティーチングアシスタント、就活など、すべてがとにかく充実しています。その分、両立していくのが大変ですが、その中にもこそ、発見ややりがいがあります。

大学院や研究室では、「スケジュール管理」と「行動すること」を心がけていました。修士の2年間でどれだけ学べるかは、この2つにかかっていると思います。私自身は、のんきな性格なので、常にその心がけを忘れないようにしています。そのおかげで、話を聞きに行く、見に行く、体験しに行くというこの重要性が身に染みんでいます。

大学院や研究室で充実している時間は、先生や友達の話や意見を聞いているときです。授業やゼミで、さまざまな人の考えを聞くことは、発見があり、面白いです。研究室や教室を離れた場所では、旅行であれ散歩であれ、屋外にいるときが一番楽しいです。友達と一緒にいるときに、お酒を飲みながら、研究室では言えない反省や、これからの展望を話すことも楽しみのひとつです。

大学院生活を通して、以前より積極的に、自分の好きなことを語れるようになりました。ふわふわとしていた学部生時代の興味が、知識を得たことで、より考えがまとまってきたのだと思います。

後輩の皆さんには、限られた大学生活を悔いのないように過ごしてほしい！そして、少しでも興味のあることができれば、大学院への進学も視野に入れてほしいです。たった2年ですが、得られる経験はたくさんあります。■



全員集合写真、移動がたくさんで大変でしたが充実したゼミ旅行でした！



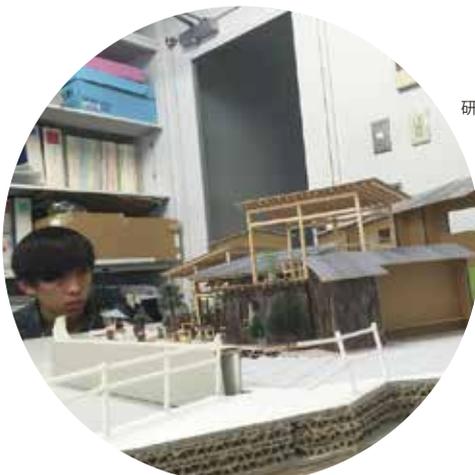
他大学と合同で発掘調査のワークショップに参加



研究室ではよく外へ。学校生活の中での大きな楽しみ



今年のゼミ旅行は瀬戸内海へ行きました



授業の一環で出すコンペの作業中です



他の研究室の大学院生たちとバーベキューへ



友達とコンペに参加しました



研究のために集めた一次資料（雑誌記事）

## 研究室を超えて対話することで、 どんどん広がっていく自分の知見

市ノ川貴之（M2 | 建築史・建築論研究室）

**私**は、戦後の建築界における都市論の展開を評価しながら、戦後に建てられた建築の保存・活用の可能性を探る研究を行っています。中でも、建築家・丹下健三を取り上げ、丹下が抱いていた思想をもとに、作品や言説が形成されていった過程と時代背景を追いながら、丹下建築の保存・活用へ向けた設計への活かし方を研究しています。自身の研究とは別に、研究室の活動として、大学院生が文献を持ち寄って、その内容について議論を行う読書会を行っています。また、毎年、建築史・建築論研究室が開催している関西研修旅行には、幹事として関わっています。

大学院への進学は、学部4年生で研究室に所属してから、真剣に悩みました。卒業研究をはじめた頃から、保存されていく建築やまち並みの本質的なことについて、強く興味を持ちはじめ、もっと考えてみたいと思い、進学することを決めました。

しかし、大学院では卒業研究のときにように、自身の生まれ育ったまち並みを捉え直すことから保存・活用の提案を考えていくのか、研究テーマを明確に定めるまでに時間がかかりました。結局、身近な環境を対象とするのではなく、戦後に建てられた日本の近代建築を対象とすることに転換しました。しかしそこには、卒業研究から考えていた問題意識が通底しています。

大学院生活で心がけていることはいくつかあります。まず、さまざまな話ができる環境をいくつもつくることです。同級生でも後輩でも、話をしていく中で、自分の頭の中が整理されていきますし、指摘を受けることで新しい発見もあります。特に、全く異なる分野の研究室の同級生の話を聞くことは、自分の知見を広げる良い機会になっていると思います。また、私の研究では文献調査が主となっているので、言葉の定義一つひとつを丁寧に考えて、言葉の示す微妙なニュアンスの違いに敏

感であることも意識しています。

大学院の利点は、自身の興味を深めていくことができる時間が取れることにつきます。自身の研究テーマについて考えを巡らせることは、悩む時間ももちろんありますが、それこそが大学院生活の充実した時間だと思っています。院生室の自分の席で文献を読む時間は、習慣となっている最も好きな時間です。

学部生のときは、文献を読んでも、自身の体験と結びつけて主観的に考えることが多かったです。大学院で、より多くの文献を扱うようになって、文脈を捉えながら、客観的な見方をしよう意識が変化してきたと思います。物事の背景や文脈に、意識的に一番重きを置くようになっていきました。

これから何に取り組んでいきたいのか、漠然としていて不安になることが多くあると思います。しかし、自分の体験を振り返ってみると、身近なところにヒントが転がっていると思います。

### 先生からひとこと

設計・計画系から回答してくれた3人の専門分野は、ランドスケープ、建築史、意匠設計でした。大学院への進学を考えたいきっかけは、自分の興味関心や将来の方向性がおぼろげにでも見えてきたとき、それをじっくりと学び、考えたいと思ったことが大きいようです。それが見つかるタイミングはさまざまで、中には就職をして働いてから、大学院への進学を考える人もいます。大学院での生活スタイルや得られるものは、専門分野や本人の意識によって異なりますが、在籍しているからこそ得られる時間や学内外とのつながりを、上手に使ってほしいと思います。学部生の皆さんも、何かを突き詰めて考え、アウトプットする場として、大学院進学を選択肢のひとつとしてみるのも良いのではないのでしょうか。

堀切梨奈子 助手

# 「学問の大学」と「実務の社会」の間で、 経験を積める大学院の楽しさ

大学院の  
楽しさを  
語ろう

1 設計・計画系

稲毛田 洸太 (M2 | 今村研究室)

**所** 属する研究室では、毎年、他大学と  
合同で、新潟県上越市を舞台に、  
地方都市の未来を議論し合うワークショップ  
の企画運営を行っています。私は、企画運営  
を総括する幹事代表として携わりました。そ  
の他にも、多くの学外活動へ積極的に参加し  
ています。

研究室を選ぶ学部3年生のときに、構造系  
と設計・計画系、どちらへ進むかで迷いま  
したが、将来、建築家になることを目指し、設計・  
計画系研究室へ入ることを決めました。また、  
そのための経験として、大学院進学は必要不  
可欠と考え、進学を希望しました。

他大学とのワークショップでは、学生とはも  
ちろん、他大学のプロフェッサーアーキテクト  
やゲストの建築家、行政など、さまざまな関  
係者と議論を行い、多くのことを学びました。  
同時に、運営サイドとしては、スケジュールリ  
ングなど企画全体を運営していくことの難しさも  
学びました。そこでは、自分自身で学び、考

えるだけではなく、さまざまな能力の向上が  
求められます。

学部生の頃は、講義などを通して知識を修  
得することを心がけていましたが、大学院や  
研究室の活動では、積極的に学内外の活動  
に参加することを心がけています。知識や学  
んだことを、積極的に外部でアウトプットし  
ていくことで、学部生時代には得られなかつた  
経験をすることができるからです。

大学院での活動は忙しいですが、研究室  
や大学院の場を離れていても、それらの活動  
のことを思考してしまうくらい、常に創造的で  
楽しいことばかりです。また、他大学との交  
流が増えることで、多くの友人ができ、幅広  
い関係性を築けたことも、大学院に進学した  
からこそだと思います。

学部生時代は、知識をインプットすること  
で精一杯だったので、“自分の考え”を積極的  
に他人へ提示することはできませんでしたが、  
大学院へ進学してからは、常にインプットと

アウトプットを反復できるようになりました。  
さらに、学外で積極的に交流していると、大  
学による考え方の違いなども知ることができ、  
より多角的な視点を持てるようになったこと  
も、学部生時代と大きな違いだと思います。

所属する研究室では、常に建築家を教育  
するための活動が行われています。私は、社  
会に出てから建築設計者、建築家としてキャ  
リアを積んでいきたいのですが、そのために  
必要な思考、知識、知恵などを、指導教員  
から学ぶことができていると感じています。実  
務を経験している建築家や社会人の方の意見  
は、アカデミックな知識を社会に応用、活用  
している術として大きな学びとなっています。

このように大学院では、学部ではできない  
経験をたくさんすることができています。学  
問を学ぶことと、社会での実務との間で、よ  
り専門的な知識や経験を積むことができます。  
大学院で過ごした時間は、自分自身にも大き  
な財産になると感じています。 **■**



大学院活動の中で行った、他大学との合同ワークショップでの集合写真

## 先生からひとこと

設計・計画系では、回答してくれた学生それぞれが、自分の学びのスタイルを持っていることが見えてきました。自分の興味があることについて、学びの方向性が見えてくるのは、卒業論文や卒業設計に取り組む学部4年生になってからという人が多いかもしれません。そこから、何をどのように学ぶかを選択することに、ステップアップを要求されるのが大学院ではないでしょうか。専門性は、主体的な学びからはじまり、気づきを得て、考え続けたりしていく経験の中で、磨かれ、深められていくことが、これらの回答から感じ取れると思います。自分の可能性を広げる手段のひとつとして、大学院はどのような場なのかということも、学部生の皆さんに知ってもらえればと思います。

加藤千晶 助手

大学院の  
楽しさを  
語ろう

## 2 環境系



騒音計で測定している様子

## 与えられた課題をこなす学部から、 自分で考え行動する大学院へ

遊佐大智（M2 | 建築音響研究室）

**私**は、建築音響研究室で、共同住宅などにおいて屋根裏を迂回して伝搬する音が、室内の遮音性能にどのように影響を及ぼすかを研究しています。

大学院への進学を考えはじめたのは、学部2年生の後期ごろでした。「環境工学」の授業で、音や設備、熱、光など、人の目に見えない要素が、人が感じる快適性や利便性に大きな影響を与えることを知り、その重要性に惹かれました。将来は、建物を利用する人の使い勝手を創造するような仕事に就きたいと考えようになり、社会へ出るために専門的な知見を広げ、幅広い人脈を築くことができる経験が大いに役に立つと考え、大学院への進学を決めました。

大学院生活で最初に感じた壁は、自分自身で課題を提示し、計画・実行し、人に伝えるという難しさでした。学部での生活と異なり、より自分が主体的に物事を決める機会が増えるため、今まで以上に自問自答をし、慎重に研究を進めることが必要になります。先生方

からいただくアドバイスや既往研究などを参考にしながら、専門分野の知識を身につけ、自分の研究につなげる姿勢を、日々持ち続けることが大切だと感じています。大学院の授業やティーチングアシスタントに並行して、自身の研究を進めていくタイムスケジュールの管理を怠らないこともまた、重要な要素だと感じます。

研究室では、先輩、後輩に関わらず、代を超えてコミュニケーションを図ることを心がけています。自分の研究に没頭することはもちろん大切ですが、自分と異なる研究をしている人と会話をすることで、互いの知識を共有することができます。さらに、意外な観点からの指摘を受けることで、新たな気づきを得ることもよくあります。常に周りの意見に耳を傾けて、アンテナを広げておくことも重要です。僕にとっては、そのようなときが最も充実した時間です。

大学院での活動の中で、最も自分が変わったことは、主体的に物事を捉えられるように

なったことです。学部生時代は、与えられた課題をこなすことが多く、自発的に考え、行動することはあまりなかったように思います。しかし、大学院生活は、基本的に自分自身で行動することがほとんどです。何かに興味を持ち、そのことに対する「なぜ?」「どんな?」を深く追求していく。自分で理解できるまで検討し続ける主体的な姿勢が、今後、社会に出たときに大いに発揮できる力になると感じています。

大学院では、研究の基本的な進め方や専門知識を学ぶことはもちろんですが、それ以外にも、物事の見え方や人間関係について学ぶことも多くあります。また、私の所属する研究室では、企業の方と一緒に研究に取り組む機会もあり、実際に社会で働かれている方々との交流の中で、社会人としての立ち振る舞いの一端を学ぶこともできます。こうした経験は、大学院ならではの経験です。 **■**

# 専門分野の知識を深めて自信がつく、 学部生時代よりも充実した日々

平方李果（M2 | 建築環境・設備研究室）

**住** 宅の省エネルギー対策や、居住者の健康に配慮した室内温熱環境の形成を目指して、住宅のエネルギー消費と暖冷房設備のあり方に関する研究をしています。

大学院での活動は、企業の方と共同研究を行ったり、実験施設に通って実験をしたり、膨大な量のデータを分析する日々です。研究成果は、年に数回、日本建築学会で発表します。大規模建築や住宅まで、さまざまな現場見学会に行くことも多く、地下の奥底に設置されている驚くほど大きな設備機械や、壁の裏側に隠されている設備機器など、普段は見ることができない隠された空間を見学します。

大学院進学を考えたのは、学部4年生の春ごろです。進路を考えたとき、専門的な知識を身につけ、建築に対する視野を広げたいと思いました。研究室配属では、設計・計画

系へ進むことも考えていたのですが、建物を使う人が健康で快適に過ごせる室内空間を提案していきたいと思ったとき、それには設備の役割が大きいのではないかと考え、環境設備の研究室に所属しました。その後、大学院進学が就職か迷ったときに、まだ自分が社会人として仕事をしている姿が想像できず、組織設計事務所に就職したいという想いもあり、大学院への進学を決めました。

大学院生になると、学部生の頃とは生活環境が一変し、一日が一瞬で過ぎてしまうほど、毎日が充実しています。先生の補佐をするティーチングアシスタントや、研究室の後輩と一緒に実験をしたり、授業の課題に取り組んだり、自分の研究を進めたり、研究室のプロジェクトを手伝ったり、自分の趣味をしたり……。さまざまな経験から知識を吸収すると

同時に、自然と要領よく物事を進めていく計画の立て方を学びました。

私の所属する研究室は、研究を協働で行うため、チームワークが研究を成功させるための鍵となります。研究に対する考え方は人それぞれですが、一人ひとりの意見を取り入れて、協力しながら、同じ目標に向かって研究を進めていきます。苦戦することも多いですが、何よりも充実した時間となります。

毎日一緒に生活をする研究室メンバーと、定期的にイベントを開催しています。これもまた充実している時間です。2、3か月に1回のボーリング大会や夏のバーベキューでは、日ごろの研究を忘れて、先生や仲間たちと一緒に楽しい時間を過ごし、交流を深めます。他にも、「設備設計」をキーワードに、さまざまな現場見学会へ行き、その建物の意匠だけではなく、設備設計の計画や、普段は見ることができない設備機械室などを見学することで、建物を見る視点が変わりました。

学部生の頃は、研究のスタートからゴールまで、研究を取り組む過程のルールが敷かれていたように思います。しかし、大学院生になると、目的を立てる計画段階から、データを得るまでの過程、その結果から解決策を導き出すまでのルールを、すべて自分で敷くことが求められます。これは、研究をしていく上で、とても興味深いことであり、苦勞することです。指導教員や関係者から定期的にアドバイスをいただくことで、今の自分の状況や、成長に気づくことができます。これは、大学院生だからこそ経験できることだと思います。■



研究室でのボーリング大会



学会発表の様子



実験の様子

大学院の  
楽しさを  
語ろう

## 2 環境系

大学院で得る知識と経験は、  
社会に出る大きな自信につながる

坪井恒太郎（M2 | 建築音響研究室）

**電** 車や道路交通などにより、建物内には振動が発生し、居住者や利用者にさまざまな影響を与えます。私は、戸建住宅において、建物がどのくらい振動の影響を受けるのかを、誰もが簡易的に予測できる方法について研究を進めています。具体的には、実際に環境振動に悩んでいる住宅にうかがい、環境振動を測定し、得られたデータの解析を学部4年生と協力しながら行っています。

学部2年生のとき、計画分野や構造分野などの授業を受ける中で、「環境工学」に興味を持ちました。やがて、研究室に所属し、環境工学を学んでいくにつれて、将来は「建物

内の快適性に関する研究・仕事に就きたい」と思うようになりました。学部3年生の時点で、大学院でより専門的な内容を学びたいと考えはじめていましたが、後期に参加した会社説明会で、社会に出るには、学部で学ぶ以上の知識や経験が必要だと感じ、大学院進学への気持ちがさらに大きくなりました。

大学院の研究では、多くの実験データを解析する必要があり、自分で研究計画を立てて実行しなくてはなりません。さらに、自分が取り組む研究のみならず、授業やティーチングアシスタント、学部4年生への指導を行うため、計画的に物事を進めていくことが大変

でした。また、自分の考えをまとめ、簡潔に伝えることに苦戦し、学会での発表における質疑応答などで、自分の知識がまだまだ足りないと感じました。

それでも、学部生と協力して取り組んだ結果を多くの人に発信し、指導の先生や大学院生、学外の先生方に多くの意見をいただくことができたときは、大学院で最も充実感を感じる瞬間です。また、研究室を離れ、学会発表や実験の後に、仲間たちと、その土地の名産品を食べながらお酒を飲むときの楽しみは、何にも代えがたいものがあります。

大学院では、取り組む内容や検討する項目が多いので、「計画的に物事を進めること」「自主的に研究内容について勉強すること」「人とのコミュニケーション」の3つを心がけています。これがあれば、自分の研究内容で疑問ができた際も、スムーズに解決することができるからです。

学部生時代と変わったことは、何よりも「追及すること」です。以前は、授業で実験や課題があっても、物事の本質が理解できていませんでした。しかし、大学院では、自分で意見をまとめ、相手に説明する機会がほとんどです。そのため、授業での発表や研究発表では、発表する内容を徹底的に調べ、自分がわからない内容をゼロにするように意識しています。物事を徹底的に追及する力は、社会で活かすことができ、大きな自信につながると考えています。



新幹線沿いの住宅で環境振動を測定している様子

## 先生からひとこと

環境系大学院生の進学理由の回答内容から、建築学を学ぶ中で、建物の居住者、利用者に対して快適な室内環境とは何か、どのように性能を高められるのかという好奇心、学部生で学んだ基礎知識だけでは物足りず、専門分野の知識を身につけたいと感じる向上心を持ったことが大きいと共通して言えます。しかし、進学後、最初に悩んだ項目として、専門分野を勉強しながら、自身の研究計画を立てスケジュールを調整すること、研究指導の先生方や後輩との各専門分野のコミュニケーションを取ることに難しさも見えています。ただし、これは企業の新入社員の悩みでもあり、学生気分から抜け出す一歩として、共通の悩みなのでしょう。私から見て、大学院生は、研究生生活を送りながら専門知識を深める中で、先生や企業の方と密に接することで自信が付き、学部生時代よりも、さらに充実した学生生活を送りながら、ひと回りも、ふた回りも成長して、大学院を修了していくように感じています。学部生の皆さんには、進路を考える際に、大学院への進学も必ず検討していただきたいです。

阪本一生 助手

大学院の  
楽しさを  
語ろう

### 3 構造系

## 「目的」ではなく「手段」へと変わった、勉強すること、学ぶこと

笠原貴喜（M2 | RC構造・構造解析研究室）

**所** 属する研究室では、主に鉄筋コンクリート構造を解析する研究をしています。火災を受けた際の耐震性能の研究、地震の被害をいち早く把握する研究、骨組や部材レベルの耐震性能に関する研究など、内容は多岐にわたります。それとは別に、大学院での主な活動は3つあります。1つ目は、ティーチングアシスタントとして、「構造力学Ⅰ・Ⅱ」や「鉄筋コンクリート構造Ⅰ」などの授業で、学部生の理解を手助けすること。2つ目は、研究室の学部4年生に対する卒業研究の指導。3つ目は、自分たちが日々研究している内容を論文にまとめ、日本建築学会などに投稿し、その内容を他の大学の先生方や企業の方々に対して発表をすることです。

大学院に進学しようと考えはじめたきっかけは、「鉄筋コンクリート構造Ⅰ演習」の講義でした。この授業は、構造設計者が計算ソフトを使用して行うことの一部を、あえて手計算することで、構造設計の理解を深めるものでした。当時、構造設計者になりたいと考えていた私は、授業で学ぶことの多くは、実際の設計のほんの一部だと知り、自分の知識の少なさを痛感しました。この講義の後に研究室を訪問し、当時の先輩たちから大学院での生活や普段の研究などについて教えていただき、大学院へ進学して、もっと構造について



研究室での普段の研究活動の様子

学び、研究してみたいと思うようになりました。

大学院生活の中で、最初にぶつかった壁は、「自分の考えていることを正確に人に伝える」ことでした。研究を進める際には、指導の先生方に、直面している問題点やそれに対する考えを説明しなければなりません。また、学会の発表時には、限られた時間の中で、自分の主張を順序立てて発表し、質問に対してもわかりやすく答えなくてはなりません。どの場面も、正確に伝えられなければ、たとえばどんなに優れた研究をしていたとしても、成果としては認められないことになるからです。

研究時に生じる問題に対して解決する方法を考えて、それを乗り越えられたときの充実

感は大きいものです。もちろん、研究を順調に進めることができれば、一番良いと思います。しかし、ぶつかった問題が難解なほど、そして、自分の想像力や今まで得てきた知識を総動員して問題を解決できたときほど、大きな達成感を得ることが出来ます。

学部生時代に比べて、「勉強に対する姿勢」と「自分に求められるスキル」が変わりました。義務教育から学部までは、常にテストの点数を取るための勉強といえると思います。しかし、大学院では、自分の研究に必要な知識や道具をそろえるために、自ら勉強をするようになりました。勉強が「目的」ではなく、「手段」に変わったことが、大きな変化でした。また、大学院で取り組むものはすべて、答えが事前にわかっていない問題を解くようなものです。だからこそ、学部のとくとは求められるスキルが変わったと感じました。

一方で、対話を通して学ぶことも数多くあります。先生方から指導・助言をいただくために対話をしていく中で、物事に対するさまざまな考え方を学びました。また、この研究室の雰囲気を引き継いできた先輩方からも、自主性や積極性を学びました。ここで学んだことは、研究室での活動だけでなく、社会に出て仕事を任されたときにも、必ず活かせると思います。



研究室のメンバーで八海山へゼミ旅行に行ったときの集合写真



2018年夏に行われた学部4年生の中間発表の様子

大学院の  
楽しさを  
語ろう

## 3 構造系

内向的な性格が外向的に、  
社会に出て役に立つ多くのスキルが身につく

服部恵多（M2 | 対震構造研究室）

**地** 震による建物の揺れを低減するための「免震構造」「制振構造」について、私たちは研究をしています。研究室の活動は、主に船橋キャンパスの環境・防災都市共同研究センターでの大型振動実験と、構造計算プログラムを使った解析研究に分かれます。前者では、先生の指導を受けながら、実験器具の設計から組み立て、工程表の作成から実験データの整理まで、すべての工程に学生が関わります。後者では、建物のモデルに対して、大小さまざまな地震動を入力し、そのときの振動特性を明らかにすることで、免制震設計における設計手順の改善を提案しています。膨大な量のデータを扱う解析研究では、作業効率化のためのプログラムを学生自身がつくこともあります。

大学院への進学は、学部3年生の春休みごろに決めました。最初は就職も視野に入れて、ゼネコンやハウスメーカー、建材メーカーなどのインターンシップや説明会に参加していました。そこで業種に関わらず、「免震」「制振」「耐震」というキーワードをよく耳にして、今後、社会に必要とされている分野であることを知りました。同時期に履修していた「対地震構造」の授業では、実際に起きた地震

災害を例に免震・制振構造の仕組みを解説したり、構造計算プログラムを使った免震構造設計の課題がありました。難しい内容でしたが、時間をかけて勉強したいと思うようになり、直接、秦先生や研究室の先輩方と話すことで、大学院への進学を決意しました。

大学院生活では、論文を書いたり、プレゼンをしたり、自分が考えていることを他者に伝える機会が多くあるのですが、最初の1年間は、専門的な内容を正確に伝えることができず、誤解を招いてしまうほどでした。しかし、物事を相手に「伝える」ことをきちんと心がけることで、徐々に内容や目的を正しく理解した上で、誤解なく伝わるような資料の作成や説明ができるようになっていきました。

研究室では、他の学生の研究や実験を手伝うことで色々な刺激を受けることができます。私の研究は解析中心ですが、もう一方の振動実験を手伝うことで、構造物が実際に揺れる現象を見ることができ、解析だけではわからない発見を得ることができます。

学部生時代は内向的な性格だったが、大学院に進学してからは、むしろ外向的になりました。きっと大学院は、外向的にならざるを得ない環境にあるのだと思います。大学

院の研究活動では、自ら行動を起こさない限り、先生や先輩からの指導はもらえません。最初は、わからないことだらけで戸惑いを感じましたが、失敗を恐れず、探求心を持って研究を進めれば、状況は好転していきます。講義を聴いて、板書を写す受動的な授業が多かった学部生時代に比べて、大学院生活の環境は大きく異なると思います。もちろん、辛くて苦しいと思うこともあります。自ら問題解決できる力を養うという意図があると、それも乗り切ることができます。

大学院での活動を通して、「結果」だけでなく、そこへ至る「過程」も大切なだと学びました。大学院の研究が、すぐに成果が出て、それが世の中に評価されることは滅多にありません。自分が今携わっている研究も、何十年も前から、先生・先輩方が継続して積み重ねてきたものの一部にすぎません。それでも、研究活動を通して多くのものが得られますし、作業を効率化するためのプログラミングや物事を伝えるスキルは、大学院を修了した後も、社会へ出て大いに役に立つと思っています。

■



研究室の合宿のため、寝台列車で香川県まで行ったときの集合写真



一般公開時に来場者へ実験施設の解説をする様子



振動台を用いて実験を行っている様子

# 学部生時代とは比べものにならないほど、 大学院生活で得るものは大きい

山崎由美子（M2 | 鋼構造・対雪設計研究室）

**研** 究室では、上部構造と下部構造の間に免震層を設けた、免震ドームの応答に関する研究をしています。

大学院への進学は、入学当初から視野に入れていましたが、学部3年生ごろから真剣に考えるようになりました。どのような職種に自分が進みたいのかを迷いながら、3年生の夏ごろからインターンシップに参加するようになりました。私は、父が構造設計をしていたため、元々構造設計に興味がありました。また、学部でさまざまな分野の建築を学ぶ中でも、構造について考えることが一番好きだったことから、構造設計職を目指したいと強く思うようになりました。構造設計職を目指すには、学部で得るものよりも、さらに多くの知識が必要なのではないかと思ったため、大学院へ進学することを決意しました。

大学院へ進み、修士研究がはじまると、自分のやりたい研究の方向性を明確にしていく

ことに時間がかかりました。また、興味があると感じた研究内容があったとしても、すでに研究が行われてしまっているということもありました。しかし、一度興味を持つと、研究内容の方向性をなかなか切り替えることができず、今研究しているテーマにたどり着くまでに時間がかかってしまいました。

大学院生活の中では、「視野を広く持つことの大切さ」を学びました。私の所属する研究室は、研究の分野が他の研究室よりも多岐にわたっており、さまざまな研究を行っています。自分の研究と少しでも異なる研究となると、私には知識が及ばず難しさを痛感するのですが、先生方はすらすらと指導やアドバイスをされていきます。その知識の多さには、いつも驚かされます。そういった先生方の背中を見ながら、視野を広く持ち続けることで、知識をどんどん増やしていけるということをも感じ続けています。

学部生たちの授業をサポートするティーチングアシスタントは、自分にとっても学びの多い時間です。自分が学部生の頃に受講していた授業を後輩に教える際に、自分が当時、気にも留めていなかった箇所や、自分が感覚のみでつかんでいた部分を質問されることがよくありました。そこで、改めて予習をして、論理的に答えることができるように心がけています。改めて学ぶことは、自分の勉強にもなっていることを実感しています。研究室の後輩の研究にアドバイスをする際にも、同様に、自分も一緒に学ぶつもりで後輩たちと話し合うようにしています。

研究やティーチングアシスタントを行うことの充実感の一方で、研究室のイベントに参加しているときの充実感も格別です。私の所属している研究室は、毎年、理工学部のスポーツ大会に、先生方も含めた全員で参加しています。普段は研究室にこもって研究に励んでいる分、このようなイベントを心底楽しむことができ、また、次の研究作業へのモチベーションへとつながっていきます。

大学院は学部とは違い、大変なこともいろいろありますが、大学院生活を経て得るものは、学部生時代のそれとは比べものになりません。それほど大きな充実感を得ることができると思います。学ぶことが多く大変ではあっても、努力によって、それは自分の知識となります。知識の幅が広がることで、今までの自分ではできなかったようなことも思いついたり、考えたりできるようになり、アイデアの幅も広がります。学生生活はあっという間なので、悔いのないように、充実した日々を過ごしたいと思います。 **【**



実験時の様子

## 先生からひとこと

大学院は、決して専門知識を身につけるだけの場ではありません。構造系に限ったことではありませんが、大学院に進学すると、「考え」「行動し」「伝える」などといった力を、研究を通じて身につけることとなります。アンケートの中でも、ぶつかった壁が「伝えることの難しさ」という回答や、先生方から学んだことが「視野を広く持つことの大切さ」や「ものの考え方」など、大学院生自身が日常の中から多くを学んでいる印象を受けます。大学院という場で専門的な知識を身につけるだけでなく、その中で人としての力を身につけることは、社会に出ても必ず皆さんの助けになると思います。社会に出てからではなかなか味わうことができないたくさんの経験を、大学院で味わってみるのはいかがでしょうか。

道明裕毅 助手

大学院の  
楽しさを  
語ろう

## 4 スペシャルインタビュー

# 大学院 進学の意味は どこに ある？



中島 肇 教授



中田善久 教授  
-理工学部大学院担当-



山中 新太郎 准教授  
-建築学科就職指導委員-

インタビュアー：石鍋雄一郎 助教、道明裕毅 助手

—まず、大学院進学の意味について、それぞれの立場からお話いただけますでしょうか。

**中田**：大学院進学を損得勘定で考える学生が多いですが、それは間違っています。大事なのは、大学は何をやる場所かということ。大学院は、勉強というよりは、学問をやる場所と考えています。単位はただのコマであって、その集合体が最後の卒業研究・設計へ集結されます。だからこそ、大学院は、良い企業に就職するためのもの以前に、学問をより深め、自分の考え方をきちんと立脚できるように、一人前の技術者や設計者になるためのものです。

だから、卒業研究と修士研究は、まったく違うものです。修士研究は、自分ですべてを企画し、研究を実行し、文章を書く。社会に出て必要なすべての要素がそこには含まれていますから、就職に強くなるのは当たり前の話です。大学院の大きな価値はそこにあると思います。

**中島**：学生たちは、あまりイメージが湧かないかもしれませんが、実は、どんな専門領域、職種でも、社会に出てからも一生勉強は続くものです。そういう意味からすると、大学院は、社会で働く約40年間の入口のわずか数年の

準備期間と捉えることができます。

学部では、広く建築学について学びますが、大学院では、より専門的な領域、技術のことを身につけながら研究をしていきます。大学院に進学すると、修士研究を2年間かけて行っていくわけですが、そこではさまざまな文献や研究などに触れながら、自分なりの課題や研究テーマを探して、深掘りしてまとめていく。それをひとつの研究としてまとめることができれば、その後、社会へ出たときに、さまざまに応用できると思います。つまり、大学院は、社会で生き残っていく基盤をしっかり身につける場所です。

**山中**：一方で、大学院への進学は、明らかにひとりの人間としても成長させます。大学院では、研究テーマについて取り組むだけでなく、先生や仲間たちと濃密に過ごし、語り合いながら、人間性が熟成していく独特の成長の期間です。

**中田**：学部を終えてからの2年間を、社会人となって過ごすか、大学院生として過ごすかは、明らかに違います。まず、社会に出たとき、大学院にいるときの1日のスピードが全く違う。たとえば、1日2時間つくろうというときに、社会に出たらそう簡単につくれな

いけど、大学院では簡単につくることができる。その分、経験したいことにきちんと投資することができます。

**山中**：大学院は、自分で課題やテーマを設定するので、よりオリジナリティをつくることにエネルギーを注げます。授業も多くはなく、単位をたくさん取得するというものもないので、自分に向き合い続けられます。

**中島**：自分とは何なのだろうか、自分は他の人と何が違うのだろうか、はじめて自分が自分でなくては認められない状況になるということです。つまり、正解を答えることがベストなのではなく、それ以前にオリジナリティが求められます。

**中田**：だから、成績が良い学生だけが、大学院への進学に向いているわけではありません。そうではなくて、成績に関係なく、何かにのめり込める人が合っている。

**中島**：大学院の修士2年間の時期に何に触れたか、何に打ち込んだかは、企業のリクルーターの立場から見ても、圧倒的に差があります。

**中田**：つまり、経験の差ですよ。大学院で

の経験は、何にも代えがたいものがある。学部卒が駄目と言っているわけではなく、事実として、学部卒と大学院を経験した人とは必ず差が生じるということです。

### 大学院進学に向いている人とは？

—大学院進学について、迷っている学生は多いと思います。メリットやデメリットはいろいろありますが、どのようなことを考えるべきでしょうか。

**中田**：少し大きな話になりますが、研究室を決めるときでも、大学院に進学するときでも、就職するときでも、その選択を「信じていけるか」がとても大切だと思います。その選択を信じられるからこそ、否が応でも求められることに努力で応えることができる。でも、実際には、それとは逆に情性で安易なほうに流れてしまう人が多いです。けれども、それでは社会に出てからはじめて本当の努力を経験することになる。それはきつと辛いですから、避けた方が良くと思います。

**山中**：研究室を選ぶときも、就職をするときも、多くの人は希望通りにいかないかもしれません。実際、イメージと現実が一致する人は少ないと思います。それでも、その状況で自分がのめり込めるテーマを見つけられる、そこにあるものを信じてみようとして入り込める、そういう力が大切です。

**中田**：だからこそ、研究室に入るときも、もっと真剣に向き合うべきだと思います。興味のある研究室のホームページを覗いたくらいで、研究室を選ぼうとしてはいけません。研究室が行っていることだけでなく、それらに社会的意義があるのか、社会からどう見られているかにまで興味を持って、調べる、知るべきだと思います。就職も同じです。ある企業のホームページだけを見て、その企業が良く思いました、なんていう人材をほしい企業などありませんから。インターネットがあれば、何だって調べられる時代です。

**中島**：みんなが一樣に同じことをしようとする傾向も気になります。昔に比べて少子化となり、勝ち抜ける可能性が高くなっているとも言えます。そのような状況だからこそ、自分の可能性をより引き出す。そのときに大学

院を選択することは、大きな力となるはずで、大学院への進学をある種の賭けみたいにする人もいますが、決してそんなことはありません。

**山中**：大学院へ進学したら、社会に出ることが遅れるとか、人生のライフサイクルが遅れるとか、そういう焦りや心配がある人もいます。しかし、昔と違って今は、社会全体が大学院を修了した学生を求める時代になりました。大学院進学は、全く賭けではない時代です。学費の面の心配も聞こえてきますが、それも奨学金のようなシステムをきちんと整えています。

**中田**：実際、大学院進学にデメリットなんてあるのでしょうか。

**中島**：ないと思います。卒業研究に合わせて、修士研究に取り組む2年間を持たねば、あらゆる面でスムーズに社会へ出て行くことができると思います。

ただひとつだけ。大学院進学には向き不向きがあります。すでにある答えに満足する人には向いていません。逆に、自分で考えて、答えを出していく人は向いています。だから、そういうポテンシャルを少しでも自分に感じる学生は進学すべきだと思います。

**山中**：それ以外にも、どちらかというと、自分が少しまとめ役になることが好きな人も、僕は大学院に向いていると思います。研究室によっては、何十人という組織ですから、その中では、取りまとめていく力が求められるときもある。それはその後、社会に出ても発揮し続けられる力になります。

### 日大理工建築独自の就職サポート

**山中**：私の研究室の大学院生は、他の専攻の授業もたくさん取っていて、みんな、すごく面白いと言っています。大学院の授業は、その先生自身の研究や経験の話が中心になって、学部の授業よりも、より面白味が増すことが影響していると思います。

**中田**：それは素晴らしいことですね。学部も大学院も、授業や場所や資料まで、すべてを存分に使い倒すべきだと思います。実は、社会に出て、5年、10年経って、もっと勉強して

おけば良かったという卒業生がたくさんいるのが事実です。でも、もうそのときには戻ることではできません。一方、大学院で2年間を過ごした人たちは、困ったことがあれば、気軽に研究室に顔を出しやすくなるメリットもありますね。

**山中**：確かに、大学院生活で得られる先輩や後輩との縦のつながりは、その後の人生に大きく影響します。お金がなくても、研究室でコーヒーを飲みながら、世代を超えて、ときにはOB・OGともいろいろなことを語ることができる。上にも下にも自分の意見がきちんと言える環境にいられる経験は、大きなものになります。

ここ数年、大学院で修得した専門的な経験を、きちんと就職先につなげる「キャリア教育プログラム」というものに力を入れています。具体的には、就職の面接のようなものではなく、さまざまな企業の中で、専門性の高い部署で活躍している大学院を修了したOB・OGたちが、大学院生に対して、どのようにしたら大学院の経験を就職に活かせるかということを教えてください。

その効果は、この数年で大きく出てきていて、設計専門職などへの大学院修了生の内定率が顕著に増えてきています。大学院の後の就職についてのケアを大学としてもやっているの、その部分は安心してもらって、飛び込んでほしいと思います。

**中田**：企業は専門の大学院修了の学生を求めている傾向にあるのですが、その募集を満たすことができていない状況です。こういう時代だからこそ、大学院を先生たちは勧めたいのです。信じて、飛び込み、その選択によって、自分をどのように変えていかを考えられれば、必ず良い方向に進めると思います。■



大学院の  
楽しさを  
語ろう

# 5 データ

## 大学院の経験から広がる未来の選択肢

大学院へ進学すると、2年間の研究活動を通して、多くのことを学びます。ここでは、大学院へ進学した皆さんの就職状況を見てみましょう。

### [業種別で見る：卒業後の進路の選択肢]

建築学科・建築学専攻からは、建築業界へ就職する学生が大半ですが、その業種もさまざまです。ゼネコンに代表される「建設業」系、ハウスメーカーと呼ばれる「住宅」系をはじめ、その他にも「不動産」系、「設備」系、「設計事務所・インテリア」系、「その他」の大きく6つに分かれます。業種ごとに、学部の卒業生と、大学院を修了した学生の業種の割合を、それぞれグラフにしました(図1)。学部卒と大学院修了で一番大きく違うのは、「設計事務所・インテリア」系への就職率です。高度な知識や経験に加え、大学院で養う人間力は、キャリアの選択肢を大きく広がります。

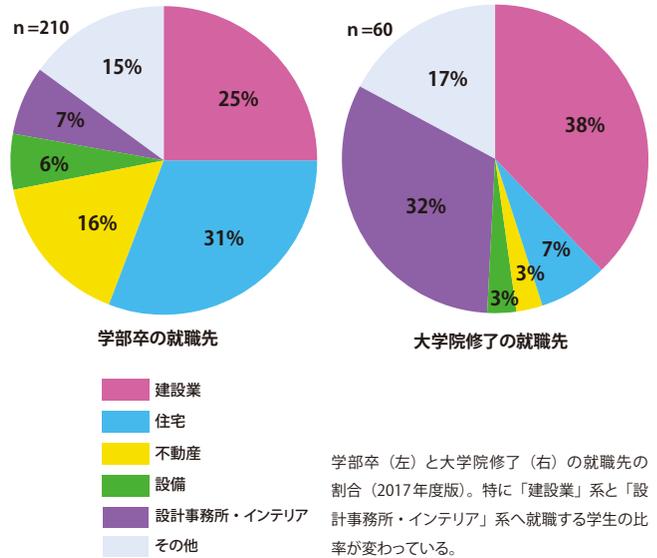


図1：学部卒と大学院修了の就職先の割合

### [建設業への就職：学部卒と大学院修了の違いは？]

また、「建設業」系への就職率も増加しています。設計から施工管理までの多くを担う「建設業」系へ進む学生は、学部卒で25%、大学院修了で38%と非常に多く、活躍しているOB・OGがたくさんいることがわかります。学部卒・大学院修了の学生が就職した建設業の会社規模を比較してみました(図2)。スーパーゼネコンと呼ばれる5社を「大手5社」、次いで売上高が大きいゼネコンを「準大手」、それ以外のゼネコンなどを「中堅・その他」としています。学部卒と比べて、大学院修了での「大手5社」への就職率がとても高いことがわかります。大きなプロジェクトを担う企業は、大学院でより多くの知識や経験を得た人材を強く求めているのです。また、大学院を修了した学生が「建設業」系へ就職した後の社内での職種についても見てみると(図3)、施工管理だけでなく、構造設計や意匠設計、その他にも設備設計や研究開発など、さまざまな場で活躍していることがわかります。つまり、大学院を修了することは、さまざまな場で活躍できる選択肢と可能性を未来に広げていると言えます。

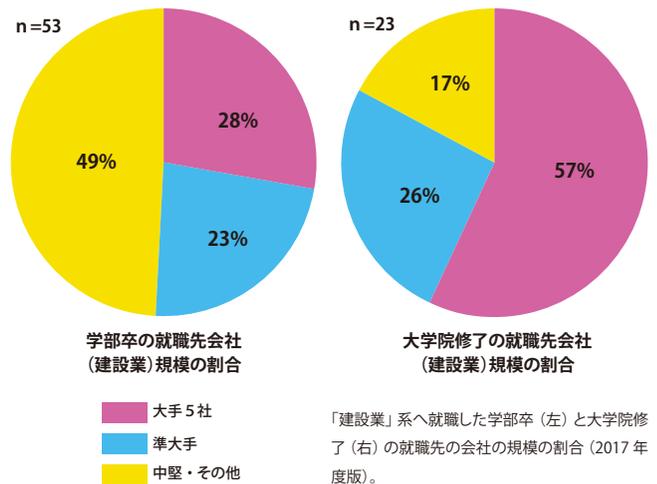


図2：学部卒と大学院修了の就職先会社(建設業)規模の割合

### [職種の特色を知る：キャリア教育プログラム]

日大理工建築の大学院では、学生のみなさんのキャリアに対するサポートとして、12月にゼネコンや組織事務所の「意匠」「構造」「設備」「開発」などの設計専門職や研究職に就職を希望する学生を対象とした「キャリア教育プログラム」を実施しています。分野が同じでも企業が異なると、仕事の内容は変わってきます。そこで、約1か月にわたり、設計専門職や研究職に就いたOB・OGを招いて、それぞれの企業における職業の具体的な内容、将来的な展望などを話していただきます。さまざまな職種をより詳しく知ることによって、学生は自分の興味や能力と照らし合わせながら、自分の将来のキャリアを定めていくことができます。その結果、修了生の多くが、設計専門職の技術者として、社会で活躍することになります。

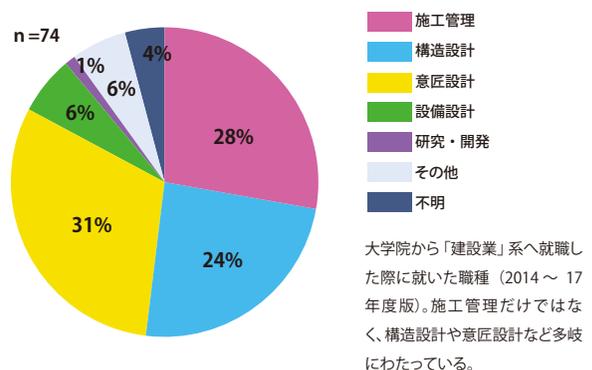


図3：大学院修了から建設業系への就職における職種の割合

## さよなら5号館 「建築の葬式」を振り返って

text=設計講師室 田中麻未也

2018年9月15日、駿河台校舎5号館に多くの卒業生や学生たちが集まり、長年過ごした校舎との別れの時間を過ごしていました。そこには、寂しさよりも、むしろ校舎を懐かしむ顔や旧友との再会を喜ぶ姿が多く見られ、それが強く記憶に残っています。「建築の葬式」は、桜門建築会会長の斎藤公男先生と桜建会青年部の声からはじまりました。それは、もうすぐ解体される5号館に対して、何かしたいという気持ちと、今まで建築学科という共同体の中で、建物の「始まり」ばかりを考え続けてきた多くの学生や卒業生たちと、建物の「終わり」について考える時間をつくってみたいというものでした。そうして桜建会や建築学科などの協力のもと、この企画がはじまりました。

まずは、外部からゲストを迎えて議論をするべきと考え、講演会と事前の勉強会が企画されました。それは、本学だけで完結した「お別れ会」にしないため、だからこそ、解剖学者の養老孟司氏や建築家の辻琢磨氏、DOCOMOMO JAPANの渡辺研司氏、橋本功氏、夏目勝

也氏、そして、美術家の中村政人氏など、豪華なゲストとともに時間をかけた「建築の終わり」に関する議論が実現しました。当日は、あいにくの雨にも関わらず、多くの方が5号館に集まって来ていただきました。建物の中では、パフォーマンスプロジェクトの居間 theaterと佐藤慎也教授による「5号館を聴く」が行われ、多くの参加者が建物から語られる声を聞きながら内部を巡り、懐かしさや思い出に浸っている様子が見られました。新校舎のタワー・スコラでは、学生や卒業生からアイデアを募った「桜建・デザインコンクール」の審査会や、養老孟司氏の講演会が行われ、さまざまな形で「建築の終わり」を考えることができたのではないかと思います。そこに集まった人たちが何を感じたかを、私たちは知ることはできません。それでも、いつか訪れる別の大切な空間の終わりに向き合うとき、それがふさわしい最期を迎えるためのきっかけになればいいな、と願っています。

竣



1：「建築の葬式」当日の様子 2：「桜建・デザインコンクール」の様子 3：「5号館を聴く」の様子 4：講演会の様子（写真/鈴木さや香）

## 第50回海外研修旅行 ヨーロッパ建築史を巡る旅

text=大川三雄 特任教授

記念すべき第50回となった今年度の海外研修旅行は、2018年8月20日から9月12日までの24日間で行われました。同行は団長の中島肇先生と私の2名、参加学生は大学院生1名、学部3年生33名、2年生6名の計40名という大きな規模でした。

私事ですが、1979年の第11回の海外研修旅行に参加させていただいたのが最初の海外体験でした。奇しくもそのツアーには、当時学部3年生であった中島先生も参加されていました。あれから40年、その間に何度となく同行の役を務めてきましたが、特任教授としての最後の年に、再び中島先生と一緒に海外研修旅行が体験できると思ってもいませんでした。

今回の研修先は、大きく3つのエリアに分かれています。最初の1週間は、ベルリン、デッソウ、ドレスデン、ブルーノ、プラハそしてウィーンというドイツ・オーストリア地区です。19世紀末から20世紀にかけての世紀転換期の建築と都市を中心に、モダニズムの源流を訪ねる旅です。次の10日間は、ローマからイタリア半島を北上して、トリノまでバスで移動して各都市を巡る行程で、建築史の言葉で言えば、古代ローマから初期キリスト教、ロマネスク、ゴシック、ルネサンス、マニエリスム、そしてバロックに至る西洋建築の本流を体験するコースでした。最後のエリアは、地中海に面したニースとマルセイユを皮切りに、北上してリヨンとディジョン、そして最終地のパリに至る行程です。ここではル・コルビュジエの主要作品やA・ペレー、A・アアルトなどの作品を見るのが主眼のコースでした。

それぞれ3つのエリアの見学に緩急をつけることで、長丁場の行程にメリハリをつけることを試みましたが、中盤のイタリアでは見学内容がかなり密になり、慌ただしい日々となってしまったと反省しています。しかし、“建築漬け”の毎日にもかかわらず、向学心旺盛な2年生や建築好きな3年生たちの熱意に支えられ、生涯の思い出に残る印象深い海外研修旅行を体

験することができました。インターネットの普及により、簡単に世界中の情報が、しかも素晴らしい精度で見ることのできる時代となりましたが、建築だけでは、実際に空間を体験しないと味わえない魅力があります。帰国後に参加者から感想文を寄せてもらいましたが、その多くは、都市や建築、そこに暮らす人々の生活などを実際に体験できたことの喜びに満ちていました。残念ながら全員の報告を載せる誌面は無理とのことで、2年生と3年生、それぞれ1名の感想文を掲載させていただきます。 駿

## 想像をかき立てる建築

text=佐藤朝子（3年 | 佐藤光彦研究室）

青く乾燥した空の下、勧誘の声、車の音、観光客の視線、あまい匂いが五感を刺激する。しかし、町中に佇む教会には、暗がりの静けさがあり、一步入ると異世界だった。中でもシュテファン教会の高く天まで伸びるシャフトから、リブがあらゆる方向に延びていく様子は、枝分かれする木々のように神秘的で、森の中にいるかのような感覚。ステンドグラスは鮮やかに光を落とし、晴れ晴れとした外界を思わせる。町中に誰をも受け入れる森のような場所があることを幸せに感じた。町中の教会は、唯一自分と向き合う場所なのかもしれない。日々の生活の中で、自分の中の感情と向き合う空間、時間は限られる。自分の住みかには趣味のモノで溢れ、心地よい場所ではあるが、ぼーっと瞑想を繰り返す空間とは異なる。

ラ・トゥーレット修道院では、外界から遮断された空間において、瞑想状態を継続させるための仕掛けがあった。水平連続窓は、角砂糖と呼ばれるブロックを目切りとしてはめ込むことで、連続した風景から、ふと我に帰らせ、再び瞑想を継続させている。一方で、中庭を臨む開口は、リズムカルなマリオン配置により、楽観的に見せていた。これは、多くの修道士が暮らす修道院に豊かな交流を生むための仕掛けであろう。このことは、ル・トロネ修道院でも感じられた。中庭には、当時、葡萄の栽培が行われ、豊かなサロン空間があった。その風景をアーチによってリズムカルに切り



ロンシャンの礼拝堂前にて集合写真



ル・トロネ修道院

取することで、より印象的な風景をつくり上げていた。実はル・トロネを参考に、ル・コルビュジエはラトゥーレットをつくっている。

**ユニテ・ダビダシオン**で泊まった部屋は、一住戸を間仕切りで2部屋にした形であった。そこには、生活の流れが一筆で描ける最小の空間があった。ベランダからは町が見え、細長い空間が町に延長されていくように感じられた。そして、ユニテに来て、私が最も感動したのは屋上である。夕方、屋上に行くと住民や地域の人が集まり、エクササイズが行われていた。しかも、友人2人も参加していて妙に馴染んでいた。私も本当は参加したかった。他にも幼児がプールで遊んでいたり、夜になると食べ物を持ち寄ってパーティーをしていたり、カップルがいたり、屋上にも地上と変わらない光景があった。ユニテには、最小の私的空間に豊かな共有空間が存在すると感じた。何よりもホテルとして公開されながらも、住民たちの生き生きとした生活風景が見られたことが、新鮮な体験であった。こんな体験ができることこそ、建築を見に行く醍醐味であろう。 駿

## 建築は人の営みの軌跡

text= 森野和泉（2年）

各時代を代表する名建築をなぞりながら、ヨーロッパ全土を駆け抜ける旅。大川先生の先導のもと、脈々と続くヨーロッパ建築史の大いなる川に身を委ね、身を以てその体系を学んだ24日間であった。語りたことは山ほどあるが、旅に一貫してあった「文脈」という視点を中心に振り返りたい。

つくっては壊される街並みに慣れてしまった日本人の私にとって、今なお受け継がれる西洋の歴史的建築群は、どこまでも新鮮であった。この土地の人々の保存・修復を重んじる姿勢は、決定的に我々とは異なる。この価値観は、西洋建築を語る上で避けられない“石”という素材にルーツがあると考えた。欧州は、地続きゆえに、民族の移動を余儀なくされてきた。人や文化が揺れ動く中、不変であるものを求める心理が、“石”の包含する永遠性に強く共鳴したのだと思う。その土地で採られた石と、その石で造

られた建築は、絶対座標として民族意識の拠点となっている。だからこそ、民衆は建築を愛し、継承することができ、何百年経った今も、オーダーを見るだけで当時の権力者の勢いが蘇ってくるのだ。

建築様式の発展は、歴史的コンテキストの上で活かされている。さらに、各様式は、発生から成熟まで建築家の手によってリレーのように引き継がれている。面白いのは、時代を切り開くのは技術者で、後続して発展させるのが建築家という法則が見られることだ。ルネサンス建築における**ブルネレスキ**、**アルベルティ**、**ブラマンテ**という遷移、ウィーン・ゼセッションにおける**O・ワグナー**から**A・ロース**をはじめとするモダニズムの展開など、歴史は繰り返されるのである。

印象的な風景に、ディジョンの街がある。夜も明け切らない早朝、仲間とともに朝市を見に旧市街へと足を運んだ。昼とは違い、静かなリベラシオン広場。冷たい空気を類に、路上で開店の支度をする人々。アーケードを覗けば、色彩豊かな品の並ぶ市が開いていた。歴史の息づくまち並みと、そこに暮らす人々の日常が重なった情景を前に、爽やかな感動を覚えたひとときであった。建築がひとりでの建つことはなく、風土や時代、人間の文脈の上に成立する。建築は人の営みの軌跡なのだ。

設計の授業では、よく模倣しなさいと言われる。なるほど、ようやくこの言葉の奥深さを理解した。たゆまなく続く系譜の中で、模倣し模倣され、バトンが渡ってゆくさまは、この上なくドラマチックだ。その壮大な劇を目の当たりにした私は、ただただ憧憬の念を抱くばかりである。 駿

日程：2018年8月20日(月)～9月12日(水)

旅行行程：【日本】成田→【ドイツ】ベルリン→デッサウ→ドレスデン→【チェコ】プラハ→ブルノ→【オーストリア】ウィーン→【イタリア】ローマ→シエナ→フィレンツェ→ラヴェンナ→ヴェネチア→ヴィチエンツァ→ミラ→ヴェローナ→ミラノ→トリノ→【フランス】ニース→マルセイユ→ニーム→オランジェ→リヨン→エヴー→ディジョン→パリ→【日本】成田

参加者一覧：【M2】藤井将大 【3年】秋山いづみ、阿部雪、飯田健太、牛澤駿介、大林弘佳、梶原大生、川岡美奈代、川越みのり、小高菜生、境亜星、佐藤朝子、佐藤晴菜、佐藤まゆ、瀧川未純、竹内諒、辻本悠香、富内紗依、鳥山亜紗子、中井星馬、新島郁海、濱田昌城、馬場岳大、久松大晃、広木友理奈、三谷和輝、宮城了大、宮田論志、矢野智也、山科摩侑、渡辺帆香、荒優花、藤井英、和田周子 【2年】天津慎一郎、大谷森、田沼元、鄭世洋、藤生浩純、森野和泉



ウィーン郵便貯金局



ディジョンの市場の内部

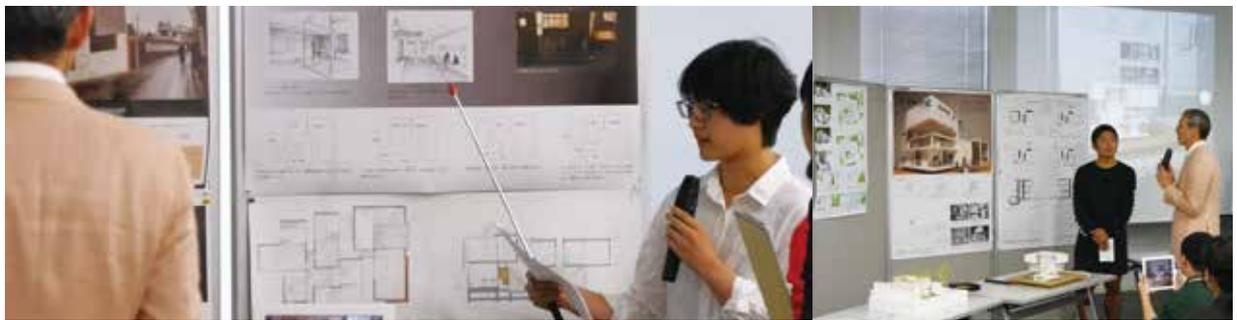
## スーパージュリー、タワー・スコラではじめての開催 最優秀賞は森野和泉さん

text=堀切梨奈子 助手

スーパージュリー（総合講評会）とは、学部2年生から4年生までの優秀作品16点のプレゼンテーション及び講評を、ゲストクリティックを招いて行う年に1度のイベントです。夏に引っ越しを終えたばかりのタワー・スコラのスタジオではじめての開催となりました。今年のゲストクリティックは福島加津也さん（東京都市大学教授/福島加津也+富永祥子建築設計事務所）、中川純さん（レピ設計室/早稲田大学大学院）、富永美保さん（tomitoarchitecture）の3人。学年や課題の垣根を超え、優秀作品が決定しました。講評会後は、賞選考会と授賞式を兼ねた懇親会が行われ、最優秀賞1点と優秀賞が2点、ゲストクリティック3名とモデレーターの名前がつけられた賞が各1点、合計7つの賞が選出されました。

### 出展者リスト

【建築設計II】（2年）課題「サードプレイス」：相川文成「目線と通路の交わり」、大山口真広「囲まれた空間」、平山茉歩「めぶき」（中川賞）、内藤亮「FRAME」（佐藤光彦賞）／課題「住宅」：橋本倫瑠「繋がりの家」、久保開陸「Y-HomE」（優秀賞）、風間花「絵本の家」、森野和泉「タイムレスハウス」（最優秀賞）  
【建築設計IV】（3年）課題「南青山コンプレックス」：佐藤朝子「青山の縮図路に対する住まい」、橋本愛佳「二つの顔」（優秀賞）、一柳亮太郎「街が彩り、街を彩る」、成澤菜由「Avenue〜つづく・つながる小景の道〜」（福島賞）、萩原史織「目線と通路の交わり」  
【建築設計VI】（4年）今村ユニット・小田島立宜「日常の美術館 東京ビエンナーレに向けた秋葉原芸術拠点の提案」、関谷ユニット・許絢華「言葉でつなぐ〜地域コミュニティの活性化と異文化交流の拠点〜」、飛田ユニット・遠藤翔「都市の補完」（富永賞）



最優秀賞の森野和泉さん。「さまざまな要素をインテグレーションする知性を評価したい」と中川さんからのコメント。

優秀賞の久保開陸君。「すべての面に対して条件が違う、方向性のある敷地に際立った主役のない建築を明快に構成していた」と富永さんのコメント。



優秀賞の橋本愛佳さん。抽象化して表現した思考が、内部体験にまで昇華されていることを評価された。

福島賞の成澤菜由さん。建築に対する想いを、社会や技術につなげていくことが期待された。

中川賞の平山茉歩さん（左）。ポエティックで感受性豊かな部分を、メタファーに翻訳していくことが期待された。佐藤光彦賞の内藤亮君（右）。プレゼンテーションでの姿勢が評価された。



富永賞の遠藤翔君。練り上げたプロジェクトの持つ可能性を、空間体験に発展させていくことが期待された。

賞選考議論の様子。左からゲストクリティックの福島さん、富永さん、中川さん、モデレーターの佐藤光彦先生。

## 新建築住宅設計競技2018において 建築学科4年の増本慶君と山地大樹君が1等を受賞

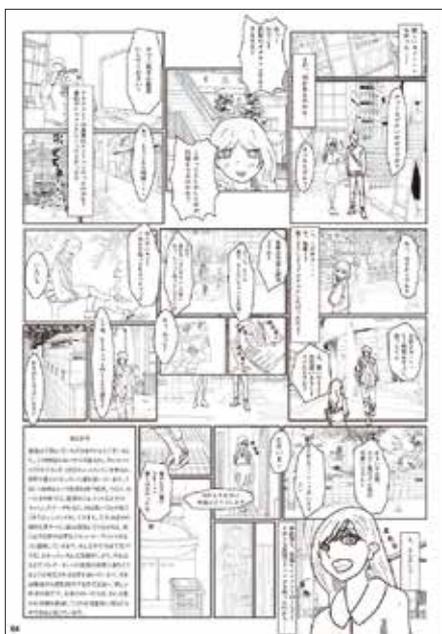
「新建築住宅設計競技2018」（主催：吉岡文庫育英会、新建築社）において、建築学科4年の増本慶君（古澤・二瓶研）、山地大樹君（同）の作品「ウカイメンド」が1等を受賞した。審査員は重松象平氏、テーマは「AIの家」で、応募総数238点（国内155点、海外83点）から1等1点に選ばれた。これは、1966年から開始された、世界的な建築家を審査員に迎える国際的な設計競技である。



### 審査員：重松象平氏に対する総評

（新建築住宅設計競技2018 ホームページ [http://www.-japan-architect.co.jp/skc/result/comments\\_-judge.html](http://www.-japan-architect.co.jp/skc/result/comments_-judge.html) より引用）

増本+山地案(1等)は、建築の提案ではない。家が居住者の機微を読み取るスキャナーとなり、そこから得た情報に沿ってAIが各自に特化した都市活動の「プログラム」をレコメンドする。すると絶妙に曖昧なレコメンドを受けた居住者は都市における人や情報や建築と関わる感覚が覚醒し、都市体験が様変わりするというストーリーだ。AIの提案に脈略がないという怖さが、逆に人間が都市をより一層冒険する契機となるようにポジティブに描かれている。「不思議の国のアリス」のように白いウサギを追って都市に迷い込む感じだ。最終的にはAIのレコメンドに従うのかそれとも自分の直感なのか。どちらにしろ都市体験がとても楽しくなりそうだ。トップダウンで考えるシステムの提案というよりはユーザーの視点に限りなく近い平凡さにも好感を持った。AIに対してポジティブであるが、同時にテクノロジーが日々の暮らしにいかにか無意識に影響してくるか、その怖さも感じとれる。建築的なアイデアはまったくないため、この作品を1等にしようか大いに迷った。だがAIと連動して建築が身体延長となるという設定から建築の各エレメントを面白くデザインできる気がする。建築も都市も見た目は全く変わらないが、ソフト=プログラムによって空間や都市の体験が劇的に変わり得るという割り切ったスタンスは深いし、現実性があるとも思った。



## NEWS &amp; TOPICS

**学生を対象としたバイオマス発電用ペレット収蔵施設外装デザインアイデアコンテストにおいて建築学専攻1年の柳沼明日香さんが最優秀賞を受賞**

「学生を対象としたバイオマス発電用ペレット収蔵施設外装デザインアイデアコンテスト」(主催:シンエネルギー開発)において、建築学専攻1年の柳沼明日香さん(佐藤光彦研)と東京電機大学大学院生2名のグループ「team komakoma」の作品「木材倉庫のミュージアム 風景を記録する玉手箱」が「最優秀賞」を受賞した。本賞は、バイオマス発電に利用されるペレットを収蔵するための施設の外装デザインを、学生を対象に募ったものであり、最優秀賞案をもとに実施設計が行われる予定である。

**第34回釜山国際建築大展2018において建築学専攻1年の力武瑞穂さんと高橋樹君が入賞**

「第34回釜山国際建築大展2018(国際アイデアコンペティション)」(主催:韓国建築家協会釜山建築家会、日本建築家協会近畿支部、天津市建築学会)において、建築学専攻1年の力武瑞穂さん(建築史・建築論研)の作品「Architectural Cenotaph」が「優秀賞」、高橋樹君(今村研)の作品「Layersd boundary」が「奨励賞ブロンズ賞」を受賞した。テーマは「architecture4.0 融合と収束」で、今後(第四次産業革命における)の建築の概念や本質とは何かを問うもの。応募総数140点から、高橋君は二次審査を通過し入選、力武さんは三次審査に進出し、現地でのプレゼンテーションを経て、最優秀賞1点に次ぐ優秀賞1点に選ばれた。

**ERI学生デザインコンペ2018において建築学専攻の高橋樹君、稲毛田光太君、建築学科4年の田中雄也君、山川香子さんのグループが佳作を受賞**

「ERI学生デザインコンペ2018」(主催:ERIホールディングス)において、建築学専攻1年の高橋樹君、建築学専攻2年の稲毛田光太君、建築学科4年の田中雄也君、山川香子さん(すべて今村研)の作品「GINZA Sky Showrooming」が「佳作」を受賞した。応募作品83点のうち1次選考で7作品が選ばれ、最終選考会(公開プレゼンテーション)を経て、最優秀賞1点、優秀作品賞1点、特別賞1点に次ぐ佳作4点に選ばれた。

**2018年度日本建築学会大会学術講演会において建築学専攻1年の松田麻未さんがシェル・空間構造部門若手優秀発表賞を受賞**

「2018年度日本建築学会大会学術講演会シェル・空間構造部門」(主催:日本建築学会シェル・空間構造運営委員会)において、建築学専攻1年の松田麻未さん(空間構造デザイン研)の論文「六角形格子により構成されたHP型ケーブルネット構造の基本的構造特性に関する研究」が「若手優秀発表賞」を受賞した。

本賞は30歳未満の学生・社会人・研究者を対象として、シェル・空間構造に関するセッションで優れた発表を行った学生・若手技術者に授与されるもので、受賞者12名に選ばれた。

**第40回コンクリート工学講演会において建築学専攻2年の笠原貴喜君と修了生の河野圭一郎君、堀川真之君が年次論文奨励賞を受賞**

「第40回コンクリート工学講演会」(主催:日本コンクリート工学会)において、建築学専攻2年の笠原貴喜君(RC構造・構造解析研)の論文「超高強度鉄筋コンクリート柱の加熱冷却後の構造性能に関する解析的研究」と、博士前期課程修了の河野圭一郎君(RC構造・構造解析研)の論文「非線形領域を考慮した偏心RC造骨組のねじれ応答評価手法の構築」、博士後期課程修了の堀川真之君(RC構造・構造解析研)の論文「高強度RC柱に生じる初期応力が2方向曲げ性能に及ぼす影響」が「年次論文奨励賞」を受賞した。本賞は39歳以下の者を対象として、優れた論文・報告の講演者の中から特に優秀な講演を行った者が表彰される。

**日本建築学会関東支部第20回提案競技「美しくまちをつくる、むらをつくる」において本学学生グループの4作品が入賞**

「日本建築学会関東支部第20回提案競技『美しくまちをつくる、むらをつくる』」(主催:日本建築学会関東支部)において、建築学専攻1年の田口周弥君(今村研)、谷山歩人君(山崎研)の作品「表裏一体 都市と神田川を結ぶ緑地帯」が「優秀賞」と「千代田区長賞」、建築学専攻1年の柳沼明日香さん、田川磨理沙さん(すべて佐藤光彦研)、吉野由起音さん(古澤・二瓶研)の作品「水都の歯車」が「優秀賞」、建築学専攻1年の田村隼人君、高橋樹君(すべて今村研)の作品「人と文化の集い橋」が「佳作」、建築学専攻1年の本田偉大君(今村研)と力武瑞穂さん(建築史・建築論研)の作品「水電都市東京 小水力発電による水都再生」が「佳作」をそれぞれ受賞した。テーマは、濠や川などの水辺空間を活かした生活・環境・文化の継承で、公開プレゼンテーションを経て、最優秀賞1点、優秀賞3点、佳作5点が選ばれた。

**学生グランプリ2018「銀茶会の茶席」において建築学専攻2年の實迫嘉乃さんらが審査員賞を受賞**

「学生グランプリ2018『銀茶会の茶席』」(主催:日本建築学会)において建築学専攻2年の實迫嘉乃さん、藤井将大君、山本紘久君、菅野匡晴君(すべて佐藤光彦研)と鷲海昂君(空間構造デザイン研)、1年の田川磨理沙さん(佐藤光彦研)、建築学科4年の北島晃大君(佐藤光彦研)の作品「外纏庵 外界を纏う竹のカーテン」が審査員賞である「加藤詞史賞」と「関野宏行賞」を受賞した。「華(はな)」をテーマに「銀茶会」で使用される創作茶席への提案が求められたもので、応募総数37点から、最優秀賞1点、優秀賞2点に次ぐ審査員賞14点に選ばれた。

**歴史的空間再編コンペティション2018in金沢において建築学専攻1年の高橋樹君が6位を受賞**

「歴史的空間再編コンペティション2018in金沢」(主催:歴史的空間再編学生コンペ実行委員会)において、建築学専攻1年の高橋樹君(今村研)の作品「重層する境界 渋谷広告立面再編による新たな商業施設的设计手法の提案」が「6位」を受賞した。本賞は、一次審査で40作品、二次審査で10作品が選出され、最終審査(公開プレゼンテーション)を経て、グランプリ1点、準グランプリ1点、3~10位各1点が選ばれた。

**千代田区を舞台にした学生設計展2018において建築学専攻1年の伊勢萌乃さん、建築学科4年の小川朋大君、小田島立宜君、山川香子さん、吉澤真君が学生優秀作品賞を受賞**

「千代田区を舞台にした学生設計展2018」（主催：日本建築家協会千代田地域会）において、建築学専攻1年の伊勢萌乃さん（建築史・建築論研）の作品「身体を通過する建築」、建築学科4年の小川朋大君（建築史・建築論研）の作品「戯曲としての建築 千代田区新スポーツセンター整備に対するカウンタープランの提案」、小田島立宜君（今村研）の作品「日常の美術館 東京ピエンナーレ構想に向けた秋葉原芸術拠点の提案」、山川香子さん（今村研）の作品「古をつなぐ 神田明神環境再編計画」、吉澤真君（佐藤光彦研）の作品「狭間に立つ」がそれぞれ「学生優秀作品賞」を受賞した。「千代田 都市・建築展2018」の一環として開催されたものであり、7大学14作品から選ばれた。

**M-1グランプリ2018において建築学科4年の土肥誠一郎君らのコンビがナイスアマチュア賞を受賞**

「M-1グランプリ2018」（主催：吉本興業）において、建築学科4年の土肥誠一郎君（地盤基礎研）がコンビを組む「キラマジック」が1回戦

を突破し、「ナイスアマチュア賞」を受賞した。本賞は、プロアマ含めて全国で4,000組以上がエントリーするM-1グランプリにおいて、1回戦で予選MCが印象に残ったと判断したアマチュア1組（全国で44組）に贈られ、ネタ動画が公式youtubeにアップされる。

**優秀建築選2018に今村雅樹教授の建築作品「熊本県医師会館」が選出**

「優秀建築選2018」（主催：日本建築家協会）に、今村雅樹教授の建築作品「熊本県医師会館」が選ばれた。本作品は、2017年に竣工した事務所と集会場を持つ地上6階建ての建築で、意匠設計を伊藤喜三郎建築研究室・今村雅樹アーキテクト設計JVが担った。

## BOOK

富田隆太教授が分担執筆した『建築物の振動に関する居住性能評価規準・同解説』（日本建築学会編、日本建築学会）が刊行された。本書は、日本建築学会環境基準として、建築物の環境振動に関する居住性能評価規準が提案され、解説されている。

## MESSAGE FROM OB/OG VOL.5

### 就職は人生を決める重要なポイント、道筋をしっかりと考えて

弓削貴史（ゆげ・たかふみ）

学部卒業：2012年

大学院博士前期課程修了：2014年

所属研究室：対震構造研究室

勤務先：鹿島建設(仮称)東陽7丁目計画増築工事事務所 兼務  
(仮称)銀座朝日ビル建替工事計画 工事課



左：担当した「東京銀座朝日ビルディング」の内観 右：仕事場で働く弓削さん

**私** が所属している事務所では、3棟が連なっている建物の内、1棟を解体し、建て直す工事を行っています。また、兼務現場では、竣工引渡しを済ませた建物にて、先方の要望を踏まえた追加工事などの対応を行っています。その中で、「工事に掛かる費用の見積りや工事の計画・管理」「竣工後の追加工事の見積り・計画・管理」を担当しています。

施工管理を目指したきっかけは、学部1年生のときに受けた「日本初の超高層、霞が関ビル」に関する講義の影響が大きいです。その際に施工を行ったのが鹿島建設だと知り、今の会社に興味を持ちました。その後、現場見学や卒業生訪問会に積極的に参加をして、現場配属を希望するようになりました。

はじめての担当工事では、完成までの道筋がわからず、無駄なことを何度もしてしまいました。現在は、その失敗を自分の財産と捉え、他工事にも活かしています。

大学院の研究では、大まかなゴールが決まっていますが、研究をどう進めるかは自分次第です。自分でスタートからゴールまでの

道筋を計画して励んでいました。

現在でもその経験が役に立ち、担当工事の完成形を考え、そこから不明点の洗い出しや調査を行いながら仕事を進めています。大学院での経験は、現在の工事業務をはじめ、他にも非常に役立っています。

就職活動中は、将来に対して不安な気持ちになったり、はじめて社会人の方々と関わったりと、慣れないことが多く、疲れをと思います。しかし、人生を決める重要なポイントであることは間違いありません。就職活動が本格化する前に、できることをやっておくべきです。面接の準備をしながら、自分が何をしたいかを考えているようでは時間が足りませんし、何よりも自分を冷静に見つめることができなくなります。自己分析・企業研究などを早めに行い、「自分はこう進もう！」と、将来のゴールを見据えた道筋を立ててから、はじめられると良いと思います。学部・大学院時代に経験したことは、自分の財産となります。将来のためにも、何事にも真摯に向き合い、頑張ってください。 〇

# ARCHITECTURE & ME

[連載] 私と建築 vol.94

## マチスのように

text= 今村雅樹 教授

=建築家を目指して、そして「私の建築」=

「私」と建築のはじまりは、予備校時に、医者ではなく建築家になりたいことをカミングアウトするところからはじまった。画家マチスについて教えてくれた医者・画家の祖父は、落胆するかと思っただが、「建築を勉強するなら東京に行きなさい」と。故郷、長崎予備校の敷地隣の「二十六聖人」「親和銀行」に足繁く通ったことも、腹極めのひとつだった。

大学院生時代、当時は、各自の憧れる建築家の元へと修行に出るつもりで就職先を決めたものだ。同じ九州出身で憧れだった村野藤吾先生へのラブレターの返事には、「現在仕事がなく数年待つてほしい」とのこと。恩師の宮川英二先生の紹介で、伊藤喜三郎先生の元に出入りさせてもらい、大学院生ながらコンペなどを担当し、喜三郎先生からは、「建築家の生きざま」を教えていただいた。20歳代の宝物である。

35歳のとき、「大阪平和資料館」コンペ最終審査で最後の2名に選ばれたとき「私の建築」は動いた。それまでも組織にいながら個人名で「住宅」などを発表させてもらっていたが、待ち望んでいた「公共建築」に新しいアイデアを実現するチャンスであった。残念ながら1等はシーラカンスで、彼らとはそのときからの付き合いである。独立してからも、インテリアや住宅設計と公開コンペに明け暮れた。「横浜港国際客船ターミナル」コンペなど2・3等が続き、「太田市休泊地域センター（太田市総合ふれあいセンター）」コンペでやっと1等が取れ

1953年、長崎県長崎市生まれ。1977年、日本大学理工学部建築学科（宮川英二研究室）卒業。1979年、日本大学大学院理工学研究科博士前期課程建築学専攻修了。1979～89年、伊藤喜三郎建築研究所にて伊藤喜三郎に師事。1989～92年、今村雅樹+TSCA 設立。1992年、今村雅樹アーキテクト設立。2000年、日本大学理工学部建築学科助教授。2005年、同教授。

た。修士論文からのテーマ「住民参加型のコミュニティセンター設計方法論」の設計ができたのが、43歳のときである。

その間、「秋葉原・YMDビル」「ヨックモック青山」「資生堂プロジェクト」など、民間の建築作品に恵まれ、東京建築賞・商環境デザイン賞などをいただけたのは、「デザインの実験」を許してくれたクライアントたちのおかげである。

=「アートからアーバンまで」学生とともに設計した建築=

JIA 新人賞・日本建築学会作品選奨などを受賞し、45歳で大学に来てからは、研究室の学生と「地域の幸せのための設計」をはじめた。住民WSで設計した「越後妻有トリエンナーレ・イエノシルシ」「南総里見発見展・風のコンビニ」などは、研究室初期のアート作品で、研究室は「アトリエ」と化していた。その後も建築コンペは毎年2～3作を出し、「日田市文化施設」「前橋市美術館」「瀬戸市図書館」「三瀬瀬再生計画」「韓国釜山グアンボク通り再生計画」「熊本県医師会館」など多くの入賞作品を残すことができた。当時の大学院生たちが、皆「建築家の卵」として振る舞えたのは素晴らしい。

いつも「私の建築」の道標になっているアンリ・マチスの言葉：「自分の作品は人の疲れを癒す肘掛け椅子のようなものでありたい」 駿

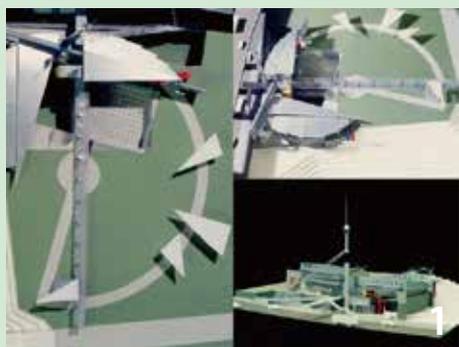


写真1：大阪平和資料館（1989/公開コンペ案2等）大阪城公園敷地内に計画される「平和資料館」実施コンペ、地下に眠る大阪城遺跡と地上に展開する平和のプログラムが形つくられた。

写真2：太田市休泊地域センター（1996～99/指名コンペ案1等）

写真3：太田市総合ふれあいセンター（1996～99/JIA 新人賞、日本建築学会作品選奨）

若手建築家数名による指名コンペ。1等決定後に太田市市長と話し合い、住民参加型で実施設計を行い、その後の住民参加型プロポーザルの典型例となる。

写真4、5：熊本県医師会館（2016～18/公開プロポーザル1等、JIA優秀建築選、日本建築学会作品選集）坂倉準三設計の旧会館建て替えプロポーザル。熊本城の前に位置するため、景観やコンテキストなどを含めた提案が建築を形づけている。着工後に熊本地震があり、復興を祈願した天井画や坂倉デザイン再生「めがね椅子」などインテリアが充実している。

# Contents

## 02 [SPECIAL FEATURE]

### 大学院の楽しさを語ろう

#### 1 設計・計画系

自分の好きなことを積極的に語れるように | 佐藤千香 (M2 | 山崎研究室)

研究室を超えて対話することで、どんどん広がっていく自分の知見 | 市ノ川貴之 (M2 | 建築史・建築論研究室)

「学問の大学」と「実務の社会」の間で、経験を積める大学院の楽しさ | 稲毛田洸太 (M2 | 今村研究室)

#### 2 環境系

与えられた課題をこなす学部から、自分で考え行動する大学院へ | 遊佐大智 (M2 | 建築音響研究室)

専門分野の知識を深めて自信がつく、学部生時代よりも充実した日々 | 平方李果 (M2 | 建築環境・設備研究室)

大学院で得る知識と経験は、社会に出る大きな自信につながる | 坪井恒太郎 (M2 | 建築音響研究室)

#### 3 構造系

「目的」ではなく「手段」へと変わった、勉強すること、学ぶこと | 笠原貴喜 (M2 | RC 構造・構造解析研究室)

内向的な性格が外交的に、社会に出て役に立つ多くのスキルが身につく | 服部恵多 (M2 | 対震構造研究室)

学部生時代とは比べものにならないほど、大学院生活で得るものは大きい | 山崎由美子 (M2 | 鋼構造・対雪設計研究室)

#### 4 スペシャルインタビュー

大学院進学の意味はどこにある？ | 中島肇 教授 × 中田善久 教授 × 山中新太郎 准教授

#### 5 データ

大学院の経験から広がる未来の選択肢

## 15 [REPORT]

・「建築の葬式 終わりの時間、始まりの空間」

・第50回海外研修旅行

・スーパージュリー 2018

## 19 [NEWS & TOPICS]

・新建築住宅設計競技 2018 において建築学科4年の増本慶君と山地大樹君が1等を受賞

・学生を対象としたバイオマス発電用ペレット収蔵施設外装デザインアイデアコンテストにおいて  
建築学専攻1年の柳沼明日香さんが最優秀賞を受賞

ほか

## 21 [Message from OB/OG]

vol.05 就職は人生を決める重要なポイント、道筋をしっかりと考えて

弓削貴史 (鹿島建設 / 2014 年修了)

## 22 [Architecture & Me]

vol.94 マチスのように 今村雅樹 教授

## 24 [Visit & Criticism]

学生建築探訪 vol.8 過去との対話 倉田慧一 (4 年 | 古澤・二瓶研)

# SHUNKEN

2019 Jan. Vol.46 No.4

「駿建」

発行日：2019年1月10日

発行人：重枝豊

編集委員：佐藤慎也・宇崎勝也・橋本修・山中新太郎・石鍋雄一郎・

古澤大輔・道明裕毅・堀切梨奈子・廣石秀造

編集・アートディレクション：大西正紀+田中元子/mosaki

発行：東京都千代田区神田駿河台1-8-14 日本大学理工学部建築学科教室

TEL：03(3259)0724

URL：http://www.arch.cst.nihon-u.ac.jp

※ご意見、ご感想は右記メールアドレスまで<shunken@arch.cst.nihon-u.ac.jp>

# Visit & Criticism

学生建築探訪 vol.8

## 過去との対話

text = 倉田慧一（4年 | 古澤・二瓶研）

今号では、東京オペラシティ アートギャラリーとTOTOギャラリー・間で開催された田根剛の展覧会「未来の記憶 Archaeology of the Future」を紹介しながら、建築を通して過去と向き合うとはどのようなことなのかを考えてみる。

両展で同じタイトルを掲げているが、副題はそれぞれオペラシティが「Digging & Building」、ギャラリー・間が「Search & Research」である。どちらも、プレゼンテーションのための模型、さまざまなフェーズのスタディ模型、リサーチで収集された膨大な写真やスケッチ、書籍、古い道具などを中心に展示が構成されている。

ギャラリー・間の展示は、それらが棚のような仕様に区別なく雑多に収められ、周囲の壁は写真やスケッチで埋め尽くされている。ここで展示されたマテリアルは、独特な軽やかさを持っていて、中庭の木箱に収めて、すぐさま事務所や他の会場へ運んでいけそうだ。

オペラシティの展示でも、同様に模型とリサーチの資料が展示の中心となっているが、会場の広さを活かして、巨大な一室を埋め尽くすように収集された画像が貼られていたり、古材を使ったインスタレーションが展示されていたり、迫力ある展示である。中でも、大きな展示室に横たわる「エストニア国立博物館」や、人が実際に入れる「新

国立競技場コンペ案」などの巨大模型は圧巻だ。

メディウムは両会場とも同じだが、ギャラリー・間では、すべての展示物が同じような大きさで脈絡なく棚に収められることで、田根の「考古学的リサーチ」という方法論が主題となる一方、オペラシティでは、巨大模型によって、リサーチから実際の建築へ飛躍する躍動感にフォーカスされている。

さまざまな場所や時代のイメージを収集する「考古学的リサーチ」は、誰もが膨大な量の情報にアクセスできる現代的状況と共鳴している方法である。青木弘司は、田根の「考古学的リサーチ」は、「アーカイビングの無効化を認めながら、スタディの客観性を担保するために、時間性を援用しつつ圧倒的な量の情報を入力している」のであり、その結果、「歴史を相対化することで、時間軸を思考が自由に行き来」できるようになり、「未だ見たことのない未来をも現在として差し出しているからこそ、一般の人々の共感を呼ぶ」のだと指摘している（※1）。しかし、この差し出された未来が、現在という時間に強く絡め取られ、現状を無批判に肯定することになってはいないだろうか。

2017年にカナダ建築センターで開催された、長谷川豪とベルギーのOFFICEの展覧会「Besides, History」（※2）と比較して考えてみよう。この展覧会の中でOFFICEは、彼らの作品の図面を、過去の建築の図面と区別なく並べるという方法で展示している。

例えば、正方形の9つの部屋を持つ「ヴィラ」という作品は、パラディオの「ヴィラ・ロトンダ」の隣に並べられている。ここで重要なのは、ヴィラ・ロトンダの図面が、OFFICEの作品を説明するだけでなく、逆に現代の作品によって、ヴィラ・ロ

トンダに説明が加えられていることである。彼らは、歴史を固定的な参照元ではなく、デザインの中で積極的に関わり得る領域として捉えている。

確かに、田根の方法では、様式によって秩序立てられた大文字の歴史からこぼれ落ちた「土地の記憶」をすくい上げることが大切にされている。建築に豊かな意味を注入するために、マスターピースの断片を散りばめるのとは違う、知識ではなく、想像力による、開放的な方法である。しかし、あくまでもその記憶がインスピレーションの源でしかなく、建築や展示によって「土地の記憶」の読み方が示されないならば、過去は固定的なものになってしまう。「考古学的リサーチ」の収集対象が、画像や形のある物だけで、言葉を含まないことから、過去を意図的に固定化しようとしているのでは、と勘ぐってしまう。歴史家だけでなく、誰にとっても、歴史とは現在と過去の絶え間ない対話である（※3）。固定的な過去の断片の順序組み合わせから描かれる未来に、どれだけの射程距離があるのだろうか。

2019年も、国立西洋美術館の「ル・コルビュジェ 絵画から建築へ—ピュリスムの時代—」や、埼玉県近代美術館の「インポッシブル・アーキテクチャー展」をはじめ、さまざまな建築の展覧会が開催される。何かを展示するには、さまざまな資料から展示するものを選び、構成を与えることが必要であり、それはまさに過去の建築に読み方を与えることである。そして、展示を観ることは、過去の建築の読み方を巡って、キュレーターや歴史と対話することである。展覧会を観ることは、とても創造的なことなのだ。皆さんも足を運んでみてはいかがだろうか。 関

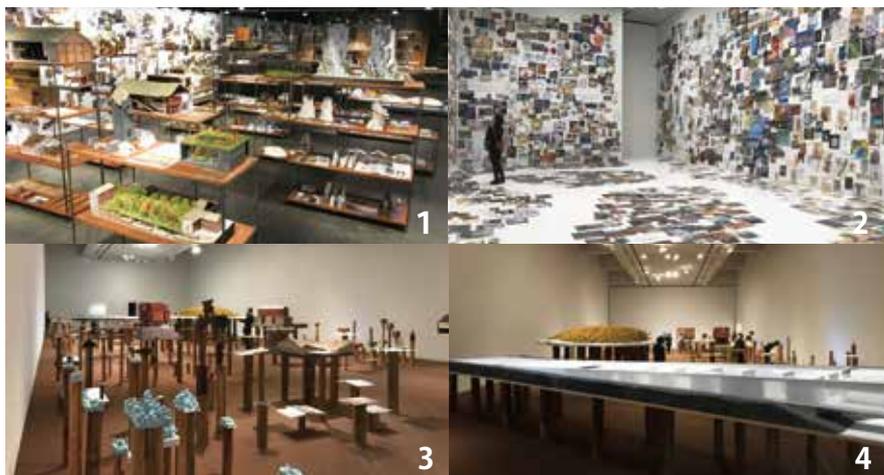


写真1：ギャラリー・間での展示。 写真2、3、4：オペラシティでの展示。

※1：青木弘司（2018）「拡張された『現在』としての建築」、『新建築住宅特集』2018年12月号、p.159、新建築社

※2：展覧会の様子は、長谷川豪他（2018）『Besides, History：現代建築にとっての歴史』鹿島出版会 に詳しい。

※3：E.H.カー（1962）『歴史とは何か』清水幾太郎訳、岩波書店 の中で、カーは、歴史とは「事実の客観的編集」でも、「歴史家の心の主観的産物」でもなく、「歴史家と歴史との間の相互作用の不断の過程であり、現在と過去との間の尽きることを知らぬ対話」であると述べているが、その根拠に、そもそも人間と環境（歴史とも換言できるだろう）との関係が、完全な独立でも、主従の関係でもないことを挙げている。

「駿建」では、在学生、教員、非常勤講師の皆さまからの、コンペやコンクール、学会、スポーツ大会、その他の受賞・表彰に関する情報提供を下記メールアドレスにて受け付けています。<shunken@arch.cst.nihon-u.ac.jp>